

使徒の働き8章4－25節 「サマリアへの宣教」

1A ピリポによる宣教 4－8

1B 散らされた人々の伝道 4

2B 執事によるしるしや不思議 5－8

2A 魔術師シモンの受けたバプテスマ 9－13

1B 回心前の人々の称賛 9－11

2B しるしや不思議を見ての信仰 12－13

3A 使徒たちの働き 14－25

1B 聖霊のバプテスマ 14－17

2B ペテロの見分け 18－24

3B サマリアの村々での宣教 25

本文

使徒の働き 8 章を開いてください。私たちの学びは、使徒の働き 8 章の 3 節まで来ました。この前お話ししましたように、8 章から 12 章は、エルサレムから始まった主の証しが、異邦人への証しへの広がっていく、聖霊の働きの記録です。いろいろなことが、どんどん起こります。その大きな変化の始まりは、迫害でした。ステパノの殉教、それに同意して、キリスト者への迫害に情熱を燃やす、サウル(パウロ)の姿を見ました。

今晚はその続きですが、二つの重要なことが出てきます。一つは、人物です。ステパノと共に、エルサレムの教会で給仕の奉仕をするよう選ばれた、ピリポです。彼が、伝道者として力強い神の福音宣教を行います。もう一つは、サマリアという地域です。ユダヤ人が宣べ伝えるみことばが、サマリアにおいて大きく受け入れられるという出来事です。

1A ピリポによる宣教 4－8

1B 散らされた人々の伝道 4

⁴散らされた人たちは、みことばの福音を伝えながら巡り歩いた。

エルサレムで彼らは迫害されて、身の安全を思って散っていきました。それは、決して格好のようものではないことを、前回、お話ししました。しかし、そのような中にあっても、みことばの福音を伝えていくということを第一にしていました。それで福音が広がるのです。

実は、このような形で福音が次々と広がっていくのを、これからの使徒の働きで読むことになります。パウロとバルナバ、後にパウロとシラスがアジアそしてギリシアのほうに福音を宣べ伝えま

す。その時は、宣べ伝えた町々で迫害を受け、逃げるようにして他の町に行く宣教になっています。最後、エルサレムへの旅でパウロは殺されかけましたが、ローマによって保護された囚人としてカイサリア、そしてローマへの囚人として船に乗ります。それで、彼がローマで証ししなければいけないと示されていた使命を果たすことになります。このようにして、逃げていているという、到底、理想とは言えない形で、福音を宣べ伝えているのです。

主は、こうした人々の否定的な部分、また、不完全な部分を完全にお用いになることのできる、恵みの神です。パウロが、弱い時にキリストの恵みが働くことを告白しましたね。「Ⅱコリ 12:9 しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」私たちはとかく、「きちんと物事を整えなければ、神の働きはできない」と言いますが、それは間違いです。もちろん、整えることは大事です。けれども、仮にそうでなくとも、むしろ自分たちの整えがすべて潰されるようなことが起こっても、そのないところ、欠けたところを主は用いられて、ご自分のことを行われることが分かります。

大事なのは、こういった状況の悪化によって、神のみこころを思い違いしないことです。多くの人が状況が悪くなると、「それは、神のみこころではない」と言うことです。こういった、「うまく行けば、みこころ。そうでなければ、みこころでない。」という、世の考えが入り込んだキリスト者の会話が、あまりにも多いです。これは注意させていただきます。みこころは、そういったうまくいく、いかないの人間的な考え、哲学に基づくものではありません。また、どちらがみこころなのかを、占いのように計り知るものでもありません。占いは偶像礼拝であると断じる人々が、みこころとなると、占いのように見なしている人々も、あまりにも多いです。

みこころは、聖書に銘記されている、神の命令です。多くの人々は、人には知られていないのです。神は隠しているとか、聖書には書かれています。「申 29:29 隠されていることは、私たちの神、【主】のものである。しかし現されたことは永遠に私たちと私たちの子孫のものであり、それは私たちがこのみおしえのすべてのことばを行うためである。」どんな状況の中でも、そこでも、主に命じられたことを行うというところに、みこころがあります。みこころと聞いたら、それは、多くの場合、すでに知られていることで、それを行うところにあります。ですから、ここでは、すべての被造物に福音を宣べ伝えなさいと、主が弟子たちに命じられた命令であります。逃げていたとしても、エルサレムにいた兄弟たちは、他の地域でみことばを宣べ伝えていたのです。

2B 執事によるしるしや不思議 5-8

⁵ピリポはサマリアの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝えた。

ピリポがキリストを宣べ伝えたのが、サマリアの町です。サマリア人と言えば、サマリアの女の話

で、ヨハネが注釈を入れた言葉を思い出します。「ヨハ 4:9 ユダヤ人はサマリア人と付き合いをしなかったのである。」サマリア人とユダヤ人には互いに深い確執がありました。

サマリアの起源は、イスラエルが北イスラエル王国と南ユダ王国に分かれていた時にさかのぼります。北イスラエルは、紀元前 722 年にアッシリアによって滅ぼされました。アッシリアは、首都サマリアにいる人々を捕え移しました。

この帝国は、他の国や民族を征服した後、その力をそぐためにあえて集団移住をさせました。非征服民は新しい地に移り住むことによって、その日常生活を確立させることによって精一杯になり、アッシリアから独立したり、反抗しようとするまでの力を持てませんでした。そして、その元の土地に別の非征服民を移住させることによって、民族のいわば、相互移住を行なっていました。

アッシリアが捕え移したのはサマリアの町とその周囲の住民だけで、残りの北イスラエルの人々は居残っていました。そこに、新しくやってきた他民族がやってきた状況ができました。そして異邦人とイスラエル人との結婚が起こった。そこからサマリア人という、新しい民族が始まりました。

ユダヤ人がサマリア人を見て、異邦人の血が混じっていると見るという民族的確執があります。けれども、それだけでありません。宗教的な確執があります。アッシリア捕囚によって、他の地域からやってきた民族は、自分たちの宗教を持ち込みました。よろしければ、後で、列王記第二 17 章 24 節から最後までをお読みになると良いと思います。33 節を読みますと、「彼らは【主】を礼拝しながら、同時に、自分たちが移される前にいた国々の慣わしによって、自分たちの神々にも仕えていた。」とあります。

さらに、やっかいなことがあります。今の、混淆宗教の始まりには、列王記第二 17 章を読みますと、アッシリアに捕え移された祭司たちが、呼び戻されて、それで主への礼拝の仕方を教えたことが書かれています。しかし、その祭司たち自身も、そもそも北イスラエルでは、主に命じられた方法ではなく、勝手に選ばれた祭司となった者たちです。北イスラエルの始まりは、ヤロブアムという王によるものですが、彼は、ユダにあるエルサレムに人々が礼拝に行き、それで心が自分から離れるのを恐れて、それで、北イスラエルの南と北に、金の子牛を造りました。北がダン、南がベテルです。そこで、ヤロブアムの任命した、高き所の祭司を常駐させて、それで祭壇でいけにえを献げさせました。(I 列王 12:25-33)

ですから、ユダヤ人とは、政治的な思惑ではるか前に分けられていたのが、北イスラエルの人たちです。政治的に、歴史的に戦ってきた相手がサマリア人です。そして、宗教的にも金の子牛を持ち込んでいました。宗教改革をしたヒゼキヤやヨシヤは、北イスラエルの人たちで主のみ仕える人々を呼び寄せ、少数ですが応答した人たちがいました。

ところが、北にいる人々にとっては、自分たちが本家本物だという自負があるのです。なぜなら、そもそもエルサレムが主の礼拝の場では、初めではなかったのです。アブラハムがバビロンのウルの町から移り住み、行きついた町々は北イスラエルにあります。シェケルやベテルです。ヤコブは、シェケムにおいて土地を買い取り、それを自分の子ヨセフに与えました(創世 48:21-22)。そして、サムエル記においては、シロが、幕屋が安置されていたところであることが書かれています。長い年月を経て、ユダ族のダビデが神の箱を自分の町エルサレムに移動させて、そこに安置させました。それから彼の子ソロモンが神殿を建て、そこに主が住まわれるという定住の礼拝の場が与えられ、それからようやく、エルサレムに祭壇も移されて、礼拝が始まりました。

これはもちろん、神の主権で、神の約束の中で決められた事です。主はエルサレムを、御自分の名を住まわせる所と定められ、ダビデの家系を神の国の礎として定めました(2サムエル 7:12-16)。しかし北にいる人々にとって、歴史的には自分たちが本家本元だと思いたいのです。

そして、その対立が決定的となったのは、バビロンが崩壊し、エルサレムに帰還した民と、周辺のサマリア人の接触です。総督ゼルバベル率いるユダヤ人の一行は、エルサレムに帰還して神殿再建を始ました、そしてこのことを聞いたサマリア人をたちが、いっしょに神殿を建築したいと申し出ました。「エズ 4:2 私たちも、あなたがたと一緒に建てたい。私たちは、あなたがたと同様、あなたがたの神を求めたいのです。私たちをここに連れて来たアッシリアの王エサル・ハドンの時以来、私たちはあなたがたの神に、いけにえを献げてきました。」けれども、ゼルバベルたちはきっぱりと断りました。「4:3 私たちの神のために宮を建てることは、あなたがたにではなく、私たちに属する事柄です。ペルシアの王キュロス王が私たちに命じたとおり、私たちだけで、イスラエルの神、【主】のために宮を建てるつもりです。」彼らは、ソロモンが異邦人とかかわりを持ってから、バビロンに捕え移されたという反省と悔い改めの心を持っているので、ここで妥協できなかったのです。

これで、サマリア人たちは激しく、神殿の再建工事に反対するようになりました。その後に、ネヘミヤがエルサレムの城壁に再建工事に取組みましたが、そこにも執拗な反対をしました(13:23-27)。こうやって、ユダヤ人とサマリア人は反目し合ったのです。ヨハネが、「付き合わなかった」と一言で注釈しましたが、歴史、民族、宗教、政治、神学など、多様な要素が複雑に絡み合っていて生きていた人々です。

ですから、イエスがユダヤ人たちと語られる時に、良きサマリア人の話をされたり、十人のらい病人のうち、一人だけサマリア人が戻ってきたとか、サマリア人について語られたのはそのためなのです。また、サマリア人たちがイエスを受け入れなかったのも、ヨハネとヤコブが、火を降らせましょかと言うなど、ユダヤ人とサマリア人にある確執がうかがい知ることができます。

しかし主は、サマリアの女のところに近づきました。それは、そこに福音の種を蒔くためであり、

回心した女によって、他のサマリア人たちがイエスをメシアとして信じ、受け入れる人々が出てきました。そして今、ユダヤ人とは付き合いたくないと思っている人々の心が開かれていて、ピリポの福音宣教にあずかっているのです。

今で言うなら、まさにユダヤ人とパレスチナ人との確執があるでしょう。日本で言うなら、日韓関係、日中関係があるでしょう。隣人であり、つながりが深いために、その確執の深さと複雑さは、人では解決できないと思われます。けれども、主イエス・キリストの平和の福音は、その壁を打ち壊し、乗り越えるようにするのです。

⁶ 群衆はピリポの話を聞き、彼が行っていたしるしを見て、彼が語ることに、そろって関心を抱くようになった。⁷ 汚れた霊につかれた多くの人たちから、その霊が大声で叫びながら出て行き、中風の人や足の不自由な人が数多く癒やされたからである。

ピリポもステパノがそうであったように、使徒たちしか行っていなかった不思議やしるしを行っていました。彼らは使徒たちに祈られて、手を置かれていましたが、その時に賜物が与えられたのかもしれませんが。ここでピリポが行っているのは、まさにイエスが行われていたことですね。汚れた霊が人から出て行きます。また中風の人、足の不自由な人たちが多くいやされます。イエスが、言われたとおりです。「ヨハ 14:12 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしを信じる者は、わたしが行くわぎを行い、さらに大きなわぎを行います。わたしが父のもとに行くからです。」

ピリポも、ステパノも、給仕をしている者でありました。与えられた奉仕の務めを、しっかりと行っていました。そして、それは単なる雑事ではなく、主を恐れ、御霊に満たされていることが条件でした。ですから、彼らは、それらの奉仕を軽んじることなく、忠実に果たしていました。そして、忠実に果たしている中で、御霊によって、これら不思議を行う力が与えられたのです。みことばを宣べ伝える知恵と知識も与えられ、そして奇跡を行う力も与えられました。

私たちはいつも、「小さなことに忠実な者が、大きなことを任される」という原則を思い出さないとはいけません。「マタ 25:21 主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』」

⁸ その町には、大きな喜びがあった。

福音の実は、喜びです。使徒の働きで何度となく出てきます。教会が興されたばかりの様子はこうです。「2:46-47a そして、毎日心をつつにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、民全体から好意を持たれていた。」喜びがいつも伴っています。

2A 魔術師シモンの受けたバプテスマ 9-13

1B 回心前の人々の称賛 9-11

⁹ ところで、以前からその町にはシモンという名の人があった。彼は魔術を行ってサマリアの人々を驚かせ、自分は偉大な者だと話していた。¹⁰ 小さい者から大きい者まで、すべての人々が彼に関心を抱き、「この人こそ、『大能』と呼ばれる、神の力だ」と言っていた。¹¹ 人々が彼に関心を抱いていたのは、長い間その魔術に驚かされていたからであった。

主が力強く働かれている時に、その働きの中に偽物が入って来ることは、アナニアとサッピラの件で学びました。人々が使徒たちの足もとに、自分の財産を売った代金を持ってきましたが、彼らはすべての代金ではないのに、これが全てだと偽りました。そのために、二人とも息が絶えてしまいました。聖霊に対して偽ったからです。ここ、サマリアにおいても、ピリポが行うしるしや不思議において、不純な動機で信じて、バプテスマを受ける人物が出ます。シモンです。

彼は魔術師であります、いわゆる手品師だったかもしれません。というのは、後で、聖霊の賜物を金で買えると思っているからです。種明かしを金で買うことは、マジシャンの間ではよく行われることです。いずれにしても、ここでの焦点は、シモン自身にずっと、力の栄光が帰せられていたからです。この人こそ、大能と呼ばれる、神の力だと言われていました。

2B しるしや不思議を見ての信仰 12-13

¹² しかし人々は、ピリポが神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝えたことを信じて、男も女もバプテスマを受けた。

シモンの魔術に対して、ピリポの行っていた奇跡は、「神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝えた」ことから来たものです。ピリポは、自分自身を宣べ伝えたのではなく、神の国を伝え、またイエス・キリストの名を伝えました。自分の力ではなく、イエスの名による力であることを宣べ伝えました。イザヤなどが見た、御国の姿には捕らわれ人が解放され、足の不自由な人が立ち上がるなどがありました。それをイエスが行われ、この方が御国の王キリストであることが明らかにされました。ピリポは今それを行っていますが、主ご自身が彼を通して行われています。パウロが言いました、「Ⅱコリ 4:5 私たちは自分自身を宣べ伝えているのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです。」

¹³ シモン自身も信じてバプテスマを受けると、いつもピリポにつき従って、しるしと大いなる奇跡が行われるのを見ては驚いていた。

イエスが命じられたように、信じる者が、イエスの名につくバプテスマを受けています。そしてシモンも信じて受けたのですが、彼の関心が、悔い改めや救いではなく、「しるしと大いなる奇跡」であ

ることが、明らかです。

すべて、信じると言った人が、真実に信じたのか？というと、残念ながらそうではないことがわかります。そして、すべてバプテスマを受けた人が、真実な心で受けたかということもそうでないことがわかります。その時には、信じますと言って、バプテスマを受けるまでしても、実はそうではないということがあるのです。

3A 使徒たちの働き 14-25

1B 聖霊のバプテスマ 14-17

¹⁴ エルサレムにいる使徒たちは、サマリアの人々が神のことばを受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネを彼らのところに遣わした。

教会が始まった時から、指導的な働きをしていたのはペテロとヨハネでした。美しの門で足なえの男を立ち上がらせた時、ペテロとヨハネでした。そしてここでのサマリアでの働きを最後にして、二人で動くことは記録されていません。サマリア宣教の後には、それぞれが巡り歩きながら福音宣教に関わっていくからでしょう。

これまで、ユダヤ人だけが神の言葉を聞き、信じてバプテスマを受けていきました。けれども、サマリア人に対して、御霊が働かれています。確かに神から出たものであることを追認するために、エルサレムの教会は二人を遣わしたのです。ペテロが、イエス様から「わたしは天の御国の鍵を与えます。(マタ 16:19)」と言われたことを思い出してください。神の御国の中で、ユダヤ人だけでなくサマリア人も主の救いを受け入れる鍵が、ペテロに今、手渡されていると見てよいでしょう。

¹⁵ 二人は下って行って、彼らが聖霊を受けるように祈った。¹⁶ 彼らは主イエスの名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊はまだ、彼らのうちのだれにも下っていなかったからであった。

ここで、信じて御霊が与えられ、新しく生まれることと、聖霊のバプテスマが異なる体験であることが、明らかに示されています。イエスの名を告白するならば、それは御霊の働きです。「Ⅰコリ 12:3b また、聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません。」もし、イエスを信じる後の御霊による新生が、聖霊のバプテスマと同じ体験ならば、バプテスマを受けた者たちが聖霊を受けるように、祈る必要はありません。

主の聖霊の約束は、御霊による新生ではなく、むしろイエスをすでに知っている者たちが、力強く証しするためでした。内に働かれるだけでなく、聖霊は私たちから外に対して働かれます。ペテロはすでに、主の名を呼び求めるすべての人にこの約束があることを話していました。「2:39 この約束は、あなたがたに、あなたがたの子どもたちに、そして遠くにいるすべての人々に、すな

わち、私たちの神である主が召される人ならだれにでも、与えられているのです。」その中に、サマリア人も含まれるということです。

¹⁷ そこで二人が彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。

手を置くことによって、聖霊が下られることが聖書には記述されています。初めはモーセがヨシュアに手を置いた時です。「申命 34:9 ヌンの子ヨシュアは知恵の霊に満たされていた。モーセがかつて彼の上にその手を置いたからである。」パウロは、テモテに按手したことによって、彼に神の賜物が与えられたことを言及しています(Ⅱテモ 1:6)。ここでも手を置いて祈り、それで聖霊を受けました。おそらく異言や預言など、ヨエル書にある約束やこれまでのしるしを見ていると、そうであろうと考えられます。

そのため、私たちカルバリーチャペルは、アフターグローと呼ばれる集会を行います。その時に、聖霊を受けるための祈りを献げることがあります。そして、その時は手を置いて祈ります。

2B ペテロの見分け 18-24

¹⁸ シモンは、使徒たちが手を置くことで御霊が与えられるのを見て、使徒たちのところに金を持って来て、¹⁹「私が手を置く者がだれでも聖霊を受けられるように、その権威を私にも下さい」と言った。

自分も御霊を受けたいと願うのではなく、なんと自分が手を置いて、聖霊が受けられるように、その権威をくださいと願っています。そして、それを、金を持ってきてお願いしているのです！自分が認められるために教会に近づいてくる人々がいます。主の御名があがめられるためではなく、自分自身が人々に受け入れられるために働きの地位が与えられたいと願う人たちがいます。けれども、御霊の賜物は、全くそういった動機とは相いれない、聖なるものです。

²⁰ しかし、ペテロは彼に言った。「おまえの金は、おまえとともに滅びるがよい。おまえが金で神の賜物を手に入れようと思っているからだ。

ペテロが、はっきりとシモンが滅んでしまうと宣言しています。金を愛することに対して、神の裁きは厳しいです。そのことを神の賜物で求めるなど言語同断であり、それで、お前の金が、おまえと共に滅びるがよいとまで言っています。ヨシュア記で、アカンが金や高価な衣服を、聖絶のものから盗んだことを思い出してください。彼は石打で滅びました。

²¹ おまえは、このことに何の関係もないし、あずかることもできない。おまえの心が神の前に正しくないからだ。²² だから、この悪事を悔い改めて、主に祈れ。もしかしたら、心に抱いた思いが赦され

るかもしれない。

ヨシュアの時は、アカンは石打にされましたが、ここで、ペテロは悔い改めの機会を与えています。そして、その罪が赦されるかもしれないと励ましています。ペテロが初めに説教した時も、「悔い改めなさい」という呼びかけでありました。

²³ おまえが苦い悪意と、不義の束縛の中にいることが、私には見えるのだ。」

「私には見えるのだ」とペテロは言っています。これまでも、神の人は、人の心にあることや、隠れて行っていることを神から知らされることがありました。エリシャが、自分のしもべゲハジが、こっそりと、らい病、ツアラアトが清められたナアマンから金や贈り物を受け取り、自分のものにしようとしていたのを見ていました。エリシャは、「Ⅱ列 5:26 今は金を受け、衣服を受け、オリーブ油やぶどう畑、羊や牛、男女の奴隷を受ける時だろうか。」と言っていますが、ゲハジが何を考えていたのか見えていたのです。これを、「知識のことば」と言います。「Ⅰコリ 12:8 ある人には同じ御霊によって知識のことばが与えられています。」超自然的に、ある人について知識が与えられます。

シモンは、おそらく、自分自身に向けられていた注目が、ピリポや使徒たちの宣教の働きで、自分に向けられなくなったことを、苦々しく思っていたのでしょう。その悪い心が、その悔い改めによって変えられるかもしれません。シモンが、それで罪赦されて、本当の意味で、イエスを信じること、バプテスマを受けた意味が分かることでしょう。

²⁴ シモンは答えた。「あなたがたが言ったことが何一つ私の身に起こらないように、私のために主に祈ってください。」

シモンは、自分の心にあった不義を悔い改めるのではなく、「おまえの金は、おまえとともに滅びるがよい」ということが起こらないように祈っています。そして、自分自身が祈るのではなく、「私のために主に祈ってください」と祈っています。へりくだって悔い改めるといふ知識が、まだ与えられていない感じがします。しかし、金で買おうなんという愚かなことはしなくなったことでしょう。

3B サマリアの村々での宣教 25

²⁵ こうして、使徒たちは証しをし、主のことばを語った後、エルサレムに戻って行った。彼らはサマリア人の多くの村で福音を宣べ伝えた。

ペテロとヨハネは、ここから自分たちもサマリア人に対して福音を宣べ伝えています。ついに、エルサレムから離れた福音宣教に従事していきました。このように、聖霊の働きは広がります。これまで全く届かなかった人々に届きます。そして障壁の壁は崩れ落ちます。